

# 第I部 大阪府のがんの罹患と死亡—その推移による対がん活動の評価

## 第1章 はじめに

### 1. 対がん活動の効果を見るために

第2次大戦が終わり、急性伝染病や結核の流行、乳幼児死亡の多発などの問題が大きく改善された後、三大成人病（がん、脳卒中、心臓病）が社会問題の一つとして登場してきました。大阪府は、昭和34年に成人病対策を開始し、36年にがん対策を本格的にスタートさせました。また、国も昭和41年にがん対策をスタートさせ、現在までの間に、がんの原因の研究、医療および予防の研究、開発などが行われ、数多くの成果が発表されてきました。

しかし、がんの死亡率は次第に増加し、大阪府では昭和46年に死亡原因の順位の1位になり、全国で見ても、昭和56年に同じく1位になって、現在まで続いています。これだけを見ますと、対がん活動の効果はみえにくいのですが、実は、大きな変化が起こっていたのです。それを見るためには、死亡統計だけでは不足です。地域集団のがんの罹患率、受療状況、患者の生存率などの実態を、長期間にわたって詳しくみて、それらがどのように変わってきたかを調べる必要があります。これによって、がん問題がどのように変わってきたか、対がん活動の効果がどのように現れるか、を解明することが出来ます。このための統計は、『地域がん登録事業』によって始めて得られます。

### 2. 新しい『がん統計』の登場…地域がん登録事業

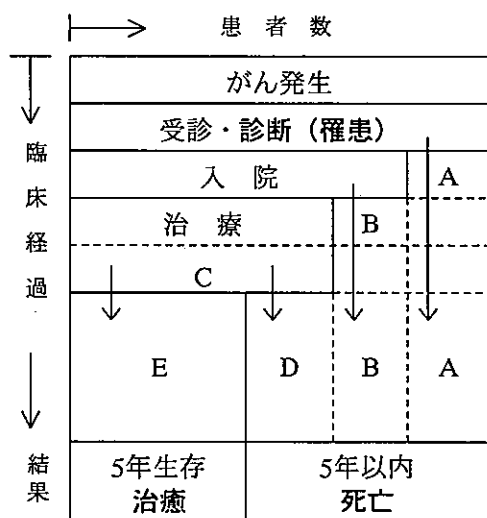


図1. がんの臨床経過—模式図

左の図1を御覧下さい。横軸に一定地域内の全患者数を、縦軸にがん患者の臨床経過を、それぞれ模式的に示しています。ヒトの身体の中のがん細胞が出来、それが増殖して症状を自覚するようになって医療機関を受診し、がんと診断されます。この時の状態を『がんに罹患した（新たにかんになった）』といいます。

次に、患者の大多数は入院して（一部は外来部門で）、治療を受けますが、既にかんが進行していて、入院、治療が出来なかった方（図1のAおよびBの部分）の予後は、良いとは申せません。また、治療を受けた

方（Cの部分）の中でも、5年以内に死亡される方（図1のDの部分）もあります。こうした経過をたどる中で、診断されてから5年以上生存した方を、一応、『治癒』とみなします（Eの部分）。

それでは、大阪府全体のがん患者について、『全患者は何人か、そのうち、A、B、C、D、Eは、それぞれ何人か』と質問されますと、非常にむづかしい問題になります。その理由は、がん患者が受診する病院は決まっておらず、そのため、「どこかの病院の成績を何倍かすれば、大阪府全体の数字が出る」わけにはゆかないからです。結局、全部の医療機関から、全部のがん患者の診療成績を集めなければ、分かりません。

ところで、今まで『がん統計』といえば、死亡統計が用いられてきました。たとえば、『平成13年の全国がん死亡数は30万人で、全死亡者数の31%にあたる』と報道されています。それはそれで、重要な意味をもっていますが、この数は、図1の（A、B、D）の部分の合計で、Eの部分は不明です。死亡統計だけでは、がんの全体像は分かりません。

また、いくつかの病院から、時々「手術患者の5年生存者の割合は何%」という治療成績が報告されますが、これも、図1のC（DとEとの合計）の一部分の成績を示すに止まりません。従って、こうした成績を数多くつみあげても、がん医療の全体像は把握できません。

この難問を解決するのが、『地域がん登録事業』です。この事業では、すべての医療機関の協力を得て、『一定地域内の人々の間で、新しくがんと診断された全部のがん患者について初回治療情報を集めるとともに、患者の予後を明らかにしよう』とするものです。そして、次に受診される患者さんに対して、これらの経験、知識を生かして、よりよく対応してもらうために行う事業です。

### 3. 大阪府のがん登録事業と本書の目的

大阪府では、早くからがん対策に着手し、そのための基礎資料を得ること、つまり、図1に示しましたががんの発生、受療、生存、死亡の全体像を明らかにすることを目的として、大阪府健康福祉部、大阪府医師会、大阪府立成人病センター調査部が協力して、昭和37年から『大阪府がん登録事業』が実施されています。

この事業では、大阪府内の医療施設、保健所、市町村などの協力を得て、がん患者の医療情報を提供してもらいます。そのため、『1人の患者について複数の情報』が集まります。つ

まり、1か所、または2か所以上の機関から、時期を違えて、同じ人の情報が提出されます。これらを患者ごとに整理した上で集計、解析します。この作業には高い精度が要求されますが、これらを次々にクリアして得られたがん統計は、毎年、年報として大阪府健康福祉部から刊行されており、日本のがん事情を代表するものとして、国の内外から高く評価されています。

本書では、過去40年にわたって蓄積されたこれらの年報から、必要な数値を抜粋して、がんの発生から治癒、死亡に至る経過の全体像（図1参照）を明らかにするとともに、年次的な変化、さらには罹患率と死亡率との対比、ならびに生存率の推移などから、大阪府で行われてきた対がん活動（予防、検診、医療を含めて）の効果を評価してみます。従来、個々の研究の評価は行われてきましたが、日本では、対がん活動全体、或いは地域医療活動全体についての評価は行われることが少なかったと思います。その意味で、本書は、試金石としての価値をもつと考えます。

『大阪府がん登録事業』の詳細ならびに毎年の報告書の内容は、巻末の文献1～3、ならびに大阪府立成人病センター調査部のホームページ（<http://www.mc.pref.osaka.jp/ocr/>）に掲載されていますので、ここでは省略します。

また、本書の内容は、『大阪府のがん登録事業』で得られた資料の一部分にすぎません。この事業で得た資料は、第IV部3章2項に示しましたように、広い分野で利用されています。

本書に収めた『大阪府がん登録事業』の成績、ならびに『大阪府立成人病センター院内がん登録事業』の成績は、府立成人病センター内に設けられたそれぞれの登録資料検討部会に本書刊行後に報告しました。使用した最新資料は、平成13年12月に刊行された「大阪府におけるがん登録、第64報」に掲載された平成10年までのがん罹患と医療の成績と、平成6年末までに診断された患者の5年生存率の成績です。

なお、本書草稿の執筆以後、平成14年12月に「大阪府におけるがん登録、第65報」が刊行され、平成11年の罹患と医療、ならびに平成7年の患者の5年生存率が示されています。ご参照下さい。

本書のための資料の抜粋ならびに、本書の記述についての一切の責任は筆者が負います。